



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年11月1日 諸聖人(年間第31主日A年)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読 黙示録7章2-4、9-14節

第二朗読 ヨハネによる第一の手紙 3章1-3節

福音朗読 マタイによる福音書 5章1-12a節

## 今日のテーマ：神のもとでの生と死

### 三つの朗読から

聖人たちは、立派な行いをした人、正しく生きた人だから聖人になったのではありません。神さまからの無償の恵みのおかげで、生きているときも死んだ後も、神さまとの交わりと人との交わりを生きようとしたから聖人なのです。今日のミサの中のみことばに聖人たちの姿を垣間見ることができます。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」(第一朗読：黙7章14節)。聖人たちは大きな苦難を人生の中で体験しました。「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい」(第二朗読：1ヨハ3章1節)。聖人たちは神さまから愛された人々なのです。「心の貧しい人は幸い」(福音朗読：マタ5章3節)。神に頼って生きていかなければ一時とて生きていけない。そんな自分の貧しさを聖人たちはよく知っていたのです。

「苦難を通して生きる」、「神から愛されて、神の子として生きる」、そして「神に頼って、心の貧しさを知って生きる」は、何も聖人だけではないでしょう。わたしたちキリスト者の生きる姿そのものです。苦難がある。でも、神さまから愛されていると信じて、神さまに頼って生きていくとき、わたしたちたちは知らず知らずのうちに、神さまとの交わりを生きているのです。

「終わりの時」を見つめるようにと招かれている11月の死者の月。その始まりに天国での壮麗な賛美の歌声に思いを馳せるのは、いつか、わたしたち一人ひとりも地上での人生を終えて、この賛美の交わりの中に入れていただけるのだという希望へとつながっていくのです。

## 説教

死者の月を迎えると思い出すエピソードがあります。それはハンセン病の患者さんたちとの交わりの思い出です。ある患者さんがいました。その方は今から90年も前、その頃、いちばん華やかで誰もが憧れた職業であるハイヤーの運転手をしていました。しかし、二十代の頃にハンセン病を発症します。その方のお母さんはあちこちのお寺、神社、加持祈祷に走り回り、息子の病気のために祈ります。時には法外なおカネを要求されたり、時には荒唐無稽なことをさせられたりしました。それもすべて不治の病と思われていたハンセン病から息子が解放されてほしいと願ったからです。そんな母親の姿を見て、その患者さんはほんとうに申し訳なく思ったそうです。結局、当時の隔離政策の結果、家族と別れ別れとなり、ある国立療養所へと入りました。もう二度と社会には帰って来られません。もちろん母親とも会えません。戸籍を抜いて、名前を変えて入所したそうです。そこで、献身的に患者さんたちに尽くすシスターたちと出会います。これが本物の教えだと感動した彼は、まるで冒険活劇のようなストーリーで療養所を抜け出します。もし捕まったら、牢屋に閉じこめられます。当時、療養所の所長には警察の署長のような権限があったそうです。

約束の地にたどり着いたイスラエルの民のように、その患者さんも、シスターたちが経営する施設にたどり着きました。そこで、70年近くの療養生活を送ったのです。

わたしが、その患者さんと出会ったのは彼の晩年でした。ある時、会話のなかで何かの拍子に死んだらどうなるかという話題になりました。この世の苦しみの多くを経験した患者さんたちにとっても、そして、すばらしい信仰を身につけていたにも関わらず、死は恐ろしいものだったようです。

しかし、その患者さんが大きな声で語ってくれました。「わしゃな、死んだら天国でまたハイヤーの運転手をするんだ。横に聖母マリアさまを乗せて、自分の母親を乗せて、後ろに諸天使たちを乗せて、そのまた後ろには聖人たちを乗せて、その後ろにはこの療養所で亡くなった仲間を乗せて、みんなを天主さまのもとにお連れするんだ」。

それはとても確信に満ちたことばでした。なんと美しい信仰の理解でしょうか。天国では父なる神さまを中心にイエスさまがいらして、マリアさまと天使たち、そして諸聖人とすべての死者がたえず三位の神を讃えているという天上の教会の宴の様子を、この患者さんは心の中にしっかりと描いていたのです。

晩秋の高い空を見上げて、あの患者さんは今日も、人々を神さまの許へとお連れする天国の運転手をしているんだなと想像する11月です。

